No. 130 2018. 4

（株）よかネット

NETWORK

大規模地震に備えてマンションを対象とした
「防災・減災マニュアル」が出来ました！ …… 2

『九州のベンチャー事情』
～株式会社FFGベンチャーパートナーズ
マネージングディレクター山口泰久氏～ …… 4

子どもの居場所～まちづくりLABの活動～ …… 6

小郡駅前地区の活性化に向けてワーキング会議、開催中！ …… 9

見・聞・食

香陵校区　都市高速道路高架下の土地利用検討のための
ワークショップ開催 …… 11

近況

防災どんたく「あんぜん・あんしんフェア
IN イオンモール香椎浜」に参加 …… 13

表紙解説 …… 15

●福岡市の若年世帯は何処に住処を求めているのだろうか？

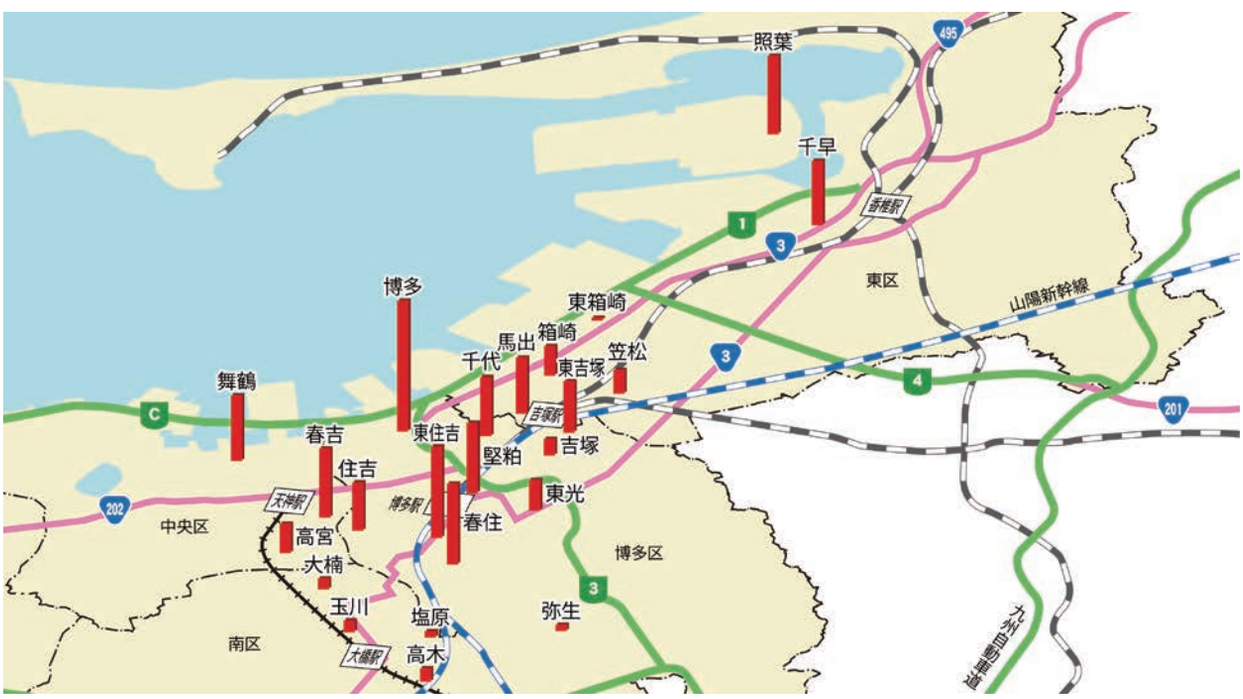
福岡市は、若年世帯（25～39歳とみる）が多く集まってくる街という印象がありますが、市全体でみると平成19年（2007年）～平成29年（2017年）の10年間では約3.3万人減少しています。

若年世帯人口は福岡市内140小学校区のうち26校区（約18.5%）しか増えていません。

多くは都心部の博多区、中央区、また近年、面的開発が住んでいる東区の一部の校区（照葉、千早）で増えています。箱崎や馬出では、九大学生が移動した後の賃貸マンションに学生以外の若年世帯が入居しているといわれています。また、博多部では立地の良さと地価の安さからワンルームマンションが多く供給されていることが要因と思われます。

福岡市ではこれらの校区以外の多くの地域で若年世帯人口は減少しており、増加する地域は特定のエリアに集中した分布状況となっているようです。（表紙解説15頁参照）

図　若年世帯人口が増加している小学校区（西区除く、増加数は表紙解説内に記載）



出典 H19年（2007年）、H29年（2017年）9月末の住民基本台帳

大規模地震に備えてマンションを対象とした「防災・減災マニュアル」が出来ました！

山﨑　裕行

2016年4月14日を前震、16日を本震とする熊本地震は、震度7の地震が2回発生し、その後も震度6弱、6強の余震が続くという地震でした。震度7の地震が立て続けに起こるというのは、これまで経験したことのないものであり大きな爪痕を残しています。

振り返ると、2004年10月23日には新潟県中越地震、2005年3月20日には福岡県西方沖地震、2007年7月16日には新潟県中越沖地震、2011年3月11日には東北地方を襲った東日本大震災というように、日本各地で立て続けに大規模地震が発生しています。

「災害は忘れた頃にやってくる」とは、著名な物理学者である寺田寅彦が残した言葉ですが、最近は地震に限らず集中豪雨、台風による被害などを含めると、「災害は忘れる前にやってくる」と言っても過言ではありません。

そのような中、地震は、いつ、どこで、どれくらいの規模で起こるか分からない厄介なものです。南海トラフ地震や、首都直下型地震の可能性が言われていますが、福岡市においても、警固断層（南東部）を震源とする大規模地震の可能性が指摘されており、今後30年の間に地震が発生する確率は高いとされています。

この警固断層ですが、国の地震調査研究推進本部によると「玄界灘から博多湾を経て、福岡平野にかけてほぼ北西－南東に分布する活断層であり、福岡市東区志賀島北西沖の玄界灘から博多湾、同市中央区、同市南区、春日市、大野城市、太宰府市を経て、筑紫野市に至る。断層帯の長さは55ｋｍ程度。」とのことです。福岡市でいうと、多くのマンションが建ち並び、人口が多いところの真下に断層が走っていることになります。

このような状況を踏まえ、今年度、福岡市防災・危機管理課から委託を受けて分譲マンションを対象とした「防災・減災マニュアル」の作成に取り組み、この度公開されましたのでご紹介します。冊子の基本的な内容については市で検討され、弊社は内容の肉付け及び全体の構成を担当しました。

●目指したのは、簡潔かつ役に立つ冊子

今回マニュアルを作成するにあたり、大学の先生をはじめマンション管理組合の方、関係機関から多くの知見を頂いたわけですが、市と話し合いを重ねて心がけたことが2つあります。

１つは、熊本地震をはじめ過去の教訓を踏まえた内容で簡潔、かつ“もしも”の時に役に立つこと。

もう１つは、これまであまり触れられていない内容も明記すること。

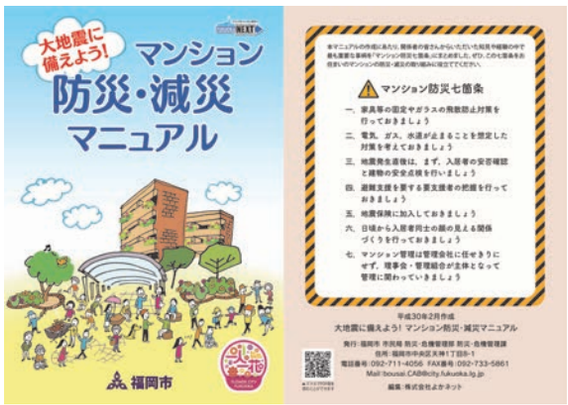
1点目については、平時から備えて頂けるように、具体的な事例を交えながらそれぞれの取り組みを解説しています。また、大規模地震が起きた際に、読み込むことなく、さっと見て行動に移せるように、「震災時の活動フロー」ということで地震発生後に取り組んでいただきたいことを4つの段階に区分し、それぞれチェックシートの形で紹介しています。

さらに、取り組みの中で重要となることについては「ポイント」という形で、また、関連する事項については「コラム」として紹介することで補足を加えています。

2点目については、後述しますが、これまでのマニュアルでは災害ごみやトイレの話があまり触れられていなかったように思います。

そこで、熊本地震における事例のほか市内の先進事例、また、市役所内の関係課に協力を頂き記載しています。

この他、手に取っていただきやすいように、



マニュアルの表紙・裏表紙

中面（活動フロー）

イラストや写真を多く使うということも心がけました。

●平時からの備えが有事に役に立つ

マンションにおける防災・減災を考えるうえでも、平時からの備えが重要です。例えば、地震保険に加入しているか、家具の転倒防止に取り組んでいるか、火が無くても大丈夫な缶詰、温かいものを食べるためのカセットコンロ・ガスボンベといった備蓄品を備えているかなどです。これら自助の取り組みが平時に出来ていれば、災害時に大きな助けとなります。

地震保険については、管理組合で加入する共有部分と個人で加入する専用部分の２つがあり、どちらも火災保険とセットで加入することになりますが、実際に熊本地震においても地震保険に加入しておいた結果、復旧工事費をかなり賄えることができ手出しを少なくすることができたそうです。お住いのマンションは地震保険に加入されていますか。

これに加えて、日頃から隣近所と顔見知りになっておいたり避難訓練をしたりすることで、みんなで助け合う共助の力が発揮されることになります。

防災の取り組みは「やらなかったら損をするけれども、やっていれば得をする。やっていて損することはない。」という性格のものです。普段から取り組めることについても紹介しています。

●管理組合の働きが重要

さて、冊子を作成する上で熊本市内で被災されたマンション管理組合の方や、福岡市内で先進的に防災に取り組んでいるマンション管理組合の方などにヒアリングを行いました。ヒアリングの中で共通していたことは、平時の取り組みや災害時の早期復旧に向けては、マンション管理組合の働きが重要であるということです。ヒアリング時に頂いたご意見を少しご紹介すると「設備関係の業者の連絡先を知っておくことが大切である。いち早く連絡し、対応をお願いすることが、早期の復旧につながる。」「管理会社はあくまでも日常の管理が主業務であり、災害時のことは想定していない。そのため、災害時は特に、管理組合が主体となり取り組んでいく必要がある。最終責任は、管理組合にある。」「他人任せは良くない。集合住宅＝共同財産、共同管理、共同利用という意識が大切である。」など。また「日頃から防災訓練をやっておくことが重要である。私達のマンションでは自主防災会を結成し、毎年、訓練を行っている。また、マンション自治会だけでなく、町内会と一緒に活動し、マンション以外の方とも顔見知りになっていたことで助かったところがある。」というような意見も頂きました。

貴重な財産を守っていくには、積極的にその管理に関わっていくことの重要性を指摘されています。このようなご意見も踏まえて「では、どうしたらよいか」「どのようなことに注意したらよいか」ということについても紹介しています。

●災害ごみとトイレの備えは忘れずに

今回、個人的にどうしても触れたいと思っていたのが「災害ごみ」と「トイレ」の問題です。

熊本地震のような大規模地震が起こると、どうしても災害ごみが発生します。それを抑えるためにも家具等の転倒防止やガラスの飛散防止の徹底が重要なのですが、完全に無くすことはできません。では、どのように対応したらよいのかがずっと気になっていました。結論を言えば「まずは、普段のごみ出しルールを守る」ということです。災害時だからと言って好き勝手にごみを出してしまうと、その分別に労力がかかり、結果として収集に時間がかかる恐れがあります。収集に時間がかかるということは、ごみ置き場にごみが山積する可能性があるということです。ごみが山積すると、衛生面や防犯面の問題が心配されます。そのような事態を起こさないためにも、普段のごみ出しルールを守ること、そして、ごみ出しのルールに変更が生じる場合は、市のホームページや新聞等のメディアを通じて情報提供があるとのことですので、市の広報に合わせたごみ出しをしましょう。この点についても、冊子で詳しく紹介しています。それからもう１つ、生きてい行くうえで避けては通れないトイレ問題です。冊子の中ではマンホールトイレと簡易トイレの２つを紹介しています。どちらも使用にあたっての注意事項等をまとめています。

余談ですが、私自身、まだ簡易トイレを使ったことがありません。一度でも使ったことがあるかどうかは、大きな差を生みます。災害時に備えて、早急に使ってみようと思います。

●市 HP 及び区役所等で閲覧可能。絶賛配布中

現在、「大地震に備えよう！マンション防災・減災マニュアル」は、市 HP 及び区役所等で閲覧可能であり、配布もしているとのことです。

なお、スマートフォン等では、右にある QR コードから市 HP の該当ページ飛ぶことができます。

ぜひ、多くの方に手に取っていただいて、マンションにおける防災・減災の取り組みにご活用頂ければと思います。

（やまさき　ひろゆき）

第 130 回地域ゼミ報告

『九州のベンチャー事情』

～株式会社ＦＦＧベンチャーパートナーズ マネージングディレクター山口泰久氏～

山辺　眞一

講師の山口さんとは、政策投資銀行に在籍当時、学研都市構想策定時からの知り合いです。昨年 5 月ＦＦＧベンチャーパートナーズに転職され、九州の大学発ベンチャー創出に関わられることになって 1 年経ちましたので、九州のベンチャー事情についてお話をしてもらいました。以下は、講演内容を踏まえながら筆者が整理したものです。

●１～３次ベンチャーブーム

まずこれまでのベンチャーブームについて簡単に整理します。

1980 年代以降、大体 10 年に一度のペースでベンチャーブームが起きています。第 1 次は、1970 年代前半で高度経済成長の頂点の時期、列島改造のさなか、1972 年モスフードや 1973 年コナミ等、食やサービスに関わる企業の創業がみられた時代です。第 2 次ブームは、1980 年代で、2 度の石油ショックを経て重厚長大型製造業から第 3 次産業の流通やサービス業が拡大していく時期です。1980 年にエイチ・アイ・エス、1981 年にはソフトバンク等が創業されました。

そして、第 3 次ブームが 1990 年代後半から 2000 年代前半までの期間です。1994 年にアマゾン、1997 年楽天、1998 年 Google、1999 年 DeNA などが創業されています。2000 年代に入り、バイオベンチャーブーム、IT バブル、インターネットバブルと呼ばれ、その後 2006 年のライブドアショック、村上ファンドショック、さらにリーマンショックによりベンチャー創業は急激に縮小します。

●第４次ベンチャーブームとは

これらの変遷を経て、以前とは違って、大企業に就職するような人材が次々に起業をしていると言われています。起業人材の意識も変化しており、使命感や社会的なインパクト、社会貢献を重視するベンチャー企業が増加していると

言われています。将来の社会基盤を担うようなテーマが増えてきていることや、地域の課題解決、快適な生活を実現するサービスというものから、AI、VR、創薬に至る先端技術に特化したテーマまで、目指す姿は多様なものになっています。

●福岡市の取り組み

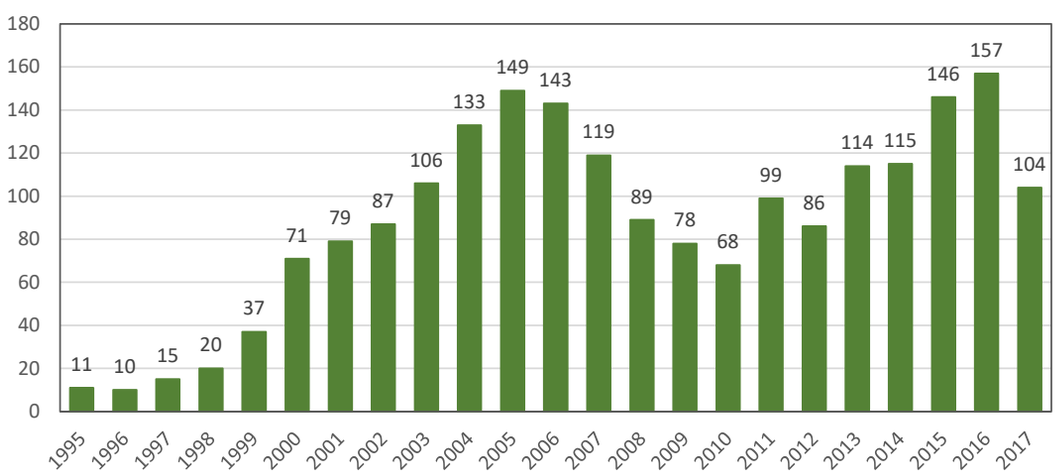
山口さんの話に戻ります。次ページの地図は、福岡市の博多区・中央区でのスタートアップ事業所がプロットされたものです。

この地図を作成した『スタートアップ投資部』は、2016年に設立された福岡を拠点としたベンチャーキャピタル『F Ventures』の両角奨太氏が、学生起業の加速化のためビジネスに対する知識向上、起業に興味ある九州の学生コミュニティ醸成を図ることを目的としています。福岡市では2012年「スタートアップ都市宣言」、2014年「グローバル創業・雇用創出特区」指定、この年に官民共働型スタートアップ支援施設『福岡市スタートアップカフェ』が開設されました。さらに、天神ビッグバンの中心的な場所に位置する旧大名小学校の校舎を改装して2017年に『Fukuoka Growth Next』がスタートアップ支援施設として開設されました。

●福岡市の起業環境

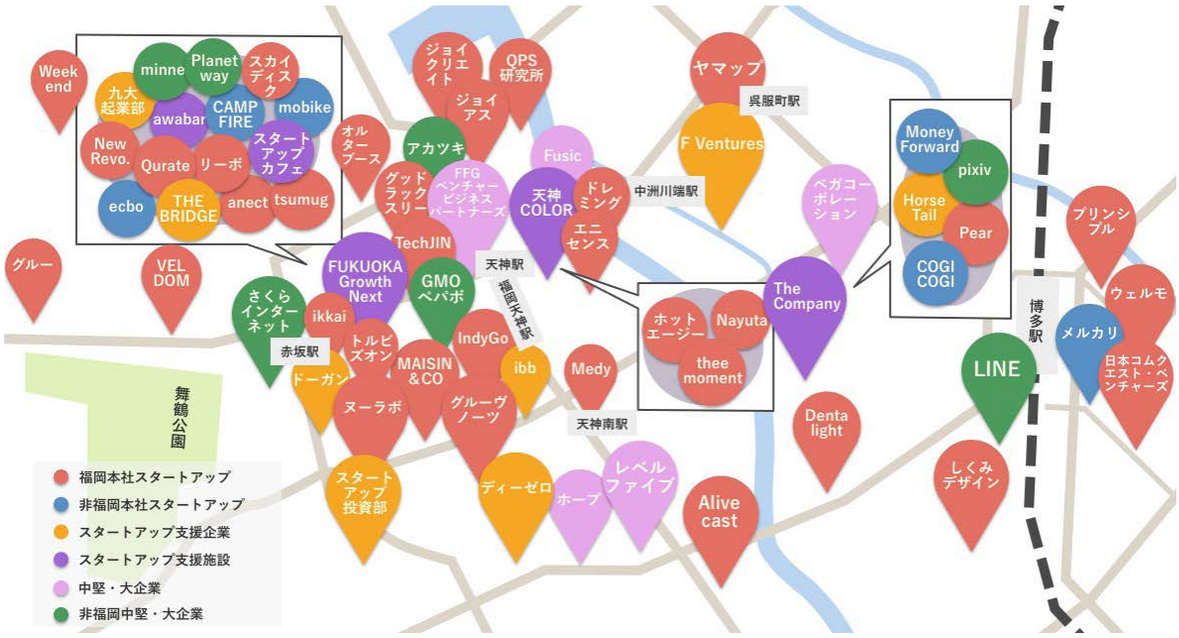
スタートアップ企業の集積は着実に進んでおり、都心を中心に立地しているのは地図でもよく分かります。これと並行して、経済団体と大学が連携して『九州・大学発ベンチャー振興会議』が2017年2月に設立されました。ここでのベンチャー発掘・支援に事務局として山口さんが関わられることになります。大学発ベンチャーの創出を支援されている山口さんが、福岡の起業環境の良さを指摘されました。ひとつは、都心に集積する支援施設です。スタートアップとして利用される支援施設（図中●の箇所）である天神COLOR、The Companyなどのコワーキングスペース、Fukuoka Growth Nextなどが都心地区に配置されたことで、スタートアップ企業も近くに集まってきたことから、事業者相互の交流がしやすい環境があります。スタートアップ企業同士による起業の可能性が生まれています。さらに地元住民、観光客など、ニーズを持つ人々との交流機会もあります。二つ目は、若い世代が集まっていることです。Fukuoka Growth Nextには、約150名の部員が在籍する九州大学起業部が入居しており、F venture主宰のスタートアップ投資部の大学生など、大学生の起業志向者が集積しているため、交流だけでなく人材も入れ替わり、知的刺激が継続します。さらにスタートアップやベンチャーキャピタル（図中●の箇所）への関心が高い学生が集まることは、切磋琢磨の機会も生まれます。三つ目は、都心と郊外をつなぐ交通利便性により、海、山、里の自然とも近く、生活の質を高めるベンチャーなど福岡らしさのあるビジネスが生まれることも期待されます。そして既に成功されているベンチャー企業が、次の世代を育成、

設立年次別大学発ベンチャー数



資料：
経済産業省調査

福岡市スタートアップ地図



作成：スタートアップ投資部（ http://investorclub.f-ventures.vc/ ）

応援する動きも、ベンチャー支援環境の大事な要素でもあります。大企業へ成長した企業群がその恩恵を社会に分配するように、次代の経済を牽引する企業群を、地域が育てる仕組みを構築することは重要です。企業内での公募制度や社外の技術やリソースを活用する「オープン・イノベーション」によるベンチャー創出も大事ですが、ベンチャー企業同士が出会うことで新たなイノベーションを発掘し投資する、さらに成功者が次の発掘・投資を行うなど、地域でのベンチャーエコシステム構築が求められていると思います。

山口さんは、「経営できる人材が不足、育成が必要で、これをサポートする人材の育成も必要である」と指摘されました。人材の育成が今も不足しており、大学等の人材育成機能の役割はますます重要であることを再確認しました。

（やまべ　しんいち）

子どもの居場所
～まちづくりLABの活動～

山田　龍雄

NPO法人子どもNPOセンター福岡の話によると、福岡市内には小中学校合わせて1,000人以上の不登校児がおり、子どもNPOセンター福岡が把握している不登校児支援等の団体が30団体あるという。

近年、共働き世帯や一人親家庭の増加に伴って、帰宅後や休日も一人で過ごさなければならない子、あるいは親との関係が思わしくない子、他でコミュニティを求めている子が増えてきているという。

このような状況の中で、心理学、教育学、福祉学等の専門分野のスキルを高めたいと考えている大学生と一緒に子どもの居場所や学びの場をつくり、運営しているユニークな団体「NPO法人まちづくりLAB（以下「まちづくりLAB」」の取組みを紹介したいと思う。

NPO法人子どもNPOセンターとは

子ども課題に取り組む市民・NPOのネットワークづくりや、行政・企業との協働を進め、「子どもにやさしいまちづくり」を目指している団体。

福岡市西鉄大橋駅近くの九州大学芸術工学部のサテライトビルを活用し、フリースペースを運営。

●多方面な子ども支援活動

まちづくりLABの永田充代表は、元々福岡市こども総合相談センターの一時保護所で働いて

いた。保護されてくる不登校で悩んでいる子や学習支援が必要な子と接するうちに、フリーな立場で子どもたちを支援することを志し、平成24年度にNPO法人を設立された。まちづくりLABは、現在「訪問型相談支援」、訪問型学習支援「ゆうがお塾」、こども居場所支援「フリースペースつばさ」、その他に「セカンドティーチャー」「未来トーク」「福岡こども学入門」など、多方面で子どもの支援活動を行っている。

これも子どもを取り巻く環境や課題も多様化していることの現れかもしれない。

訪問型学習支援事業は、1時間当たり1,500円の有料であるが、その他の事業については無料のものが多く、運営費は福岡市や自治体からの助成金で賄っている。

スタッフは基本的に学生ボランティアであり、無償であるが、「フリースペースつばさ」では交通費500円を支給している。

永田さんに聞くと「月に1回、コアスタッフの学生さんとミーティングを行い、各事業の責任者も学生にお願いしています。私は、問題になっているところなど、たまに様子を見るぐらいでほとんどが学生自身で行ってもらってい

各事業の紹介

【訪問型相談支援】
・定期的な訪問で関係をつくり、適切な支援につなげていくもの、相談の入口としての機能
【訪問型学習支援】
・訪問型の学習支援を行っていくもの、学習支援を通じて悩みなども聴き、支援へとつなげていく
【フリースペースつばさ】
・月2回、香住丘公民館で開設
・小学生から高校生までの子どもが毎回約5～10名参加
【セカンドティーチャー】
・筑紫野市立筑山中学校で開設
・週1回、放課後に実施
・子どもたちの自習の支援
【未来トーク】
・年1回開催　今年で4回目
・筑紫野市立筑山中学校で開催
・「将来を考えるきっかけづくり」を目的として大学生30人と中学生が様々なテーマでトーク

る。」という。

これは永田さんが、子どもの接し方や意識の持ち方など、学生さんに充分レクチャーしているから出来ているのではないかと思う。

●アルバイト感覚の学生では勤まらない

スタッフの学生さんは、コアスタッフが12名、ボランティア学生が30名程度である。常時40数名の学生が参加しているという。さぞやコーディネートも大変ではなかろうかと思うが、永田さんがコアスタッフを上手くコーディネートされているのは、月1回のミーティングが決め手ではないかと思った。

現在の学生スタッフは、福大、筑紫女学園大、福岡教育大、北九州大、九大、その他学生スタッフOBやOGも関わっている。

永田さんは「時給何百円といったアルバイト感覚で来る学生さんは、私たちの活動には不向きであり、良いスタッフは集まりません。やはり自分の専門分野のスキルを高めたい、実際に問題がある子どもたちと接して、体験を通じて勉強をしたいといったモチベーションのある学生さんの方が優秀であり、続いてくれます。」とのこと。

人材も今のところは困っていないらしく、学生スタッフが友人やツテを頼って集めてくるという。弊社の繁忙期にはアルバイトスタッフを集めるのに苦労することも多々あるので、羨ましい限りである。

現在、子どもたちと係わっていく専門性のある学生を養成すること、また、学生同士のネットワークを構築していくため、「福岡子ども支援学生連盟」を立ち上げる準備をしているという。この学生ネットワークが設立されることで、さらに組織体としての安定感は増すこととなる。

●公民館を活用した「子どもの居場所づくり」

実際に子どもの居場所では、どのような子どもさんが参加し、学生スタッフとどのようなコミュニケーションをとっているのかを知りたくなり、香住丘公民館で行っている「フリースペースつばさ」を昨年の12月半ばに訪問させていただいた。

参加した子どもたちはスタッフとボードゲームを楽しんだり、おしゃべりしたりと自由に過ごします

パンケーキやたこ焼きなどを料理を楽しんだり、キーホルダーを作ったり、場を和ませる工夫をしている
写真：まちづくりLAB　HPより

永田さんが以前より香住丘公民館の主事さんと知り合いであったことから、子どもの居場所の打診を受け、小学校と連携しながら開設したという。現在、月2回の日曜日（午後12:30～16:30）に開設している。公民館は文化活動や地域活動もあり定期的に一部屋を開けるということは難しいだろうと思ったが、香住丘校区住民の理解があったおかげで、公民館利用も可能になったのではないかと思う。

私が12時半におじゃまると男子学生スタッフと女子学生スタッフ各々1名、子どもは中学生の子が1名参加していた。

ここでは決まったプログラムもなく、ただ学生さんとおしゃべりをし、本を読んだり、ゲームをしたりとゆったりした時間を過ごしている。

13時過ぎたころに中学生の子2名と小学生の子1名が参加し、場も賑やかになってきた。

学生スタッフとの話の内容を聞いてみると、漫画とゲームの話がほとんどであり、私はまったくついていけない世界であった。

しかし、学生さんに促されて、ブロックスゲームを進められ、一人の子どもさんと初めての対戦となった。結果は2戦2敗。形の異なったピースを盤に適当に並べていき、最後までピースをはめ込んだ方が勝ちといった非常に単純なゲームであるが、先を読んで相手をブロックしたりと奥が深いらしい。このゲームで子供たちと少しは打ち解けたが、やはり漫画とゲームの話にはついていけない。子どもたちと年の近い学生スタッフだからこそ、できる支援であることを痛感するとともに、学生スタッフの友達感覚のコミュニケーションの取り方があるからこそ、子どもたちも、続けてこの場所に参加するのであろうと思った。

15時過ぎには、学生スタッフの一人がパンケーキづくりを始めた。これには興味ある子だけが参加し、一緒に調理をし始めたが、このパンケーキづくりも決して強制ではなく、まさに学生スタッフと子どもが兄弟のように家庭で楽しんでいる雰囲気であった。

私は、学生スタッフとはヒアリングを兼ねて色々と話をさせていただいたが、子どもたちとは一言、二言、言葉を交わすだけであった。実際は、時間をかけてやっていくしかないのであろう。

●人と運営資金をどうしていくのか

2月25日に福岡市子ども未来局こども部青少年健全育成課主催の「若者の居場所づくり交流会」に参加した。

東区箱崎の子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」代表であり、宮崎国際大学教育学部准教授である山下智也氏のセミナーとワークショップが行われた。

この交流会には子どもの居場所づくりに係わっている人、これから立ち上げようとする人、行政関係者など約40数名が集まっていた。

セミナーの主なテーマとしては、継続してい

くための人材確保と資金をどうしていくかであった。山下さんが17年間運営に携わってこられた「きんしゃいきゃんぱす」でも、これまで行政や企業等から助成金で運営されてきており、安定しているとは言えない。

各団体の多くは、人材の確保と資金力を課題として抱えているようだ。社会的にさらに必要性が高まっている子どもの居場所づくりは、身近な地域との関わりの中での事業であることを考えると、行政の支援や受益者負担のほかに、地域との連携を考えていくべきではないかと思った次第である。

（やまだ　たつお）

小郡駅前地区の活性化に向けて ワーキング会議、開催中！

山﨑　裕行

前号でご紹介した小郡駅前地区の活性化に向けたワーキング会議の続編です。

昨年12月から始まったワーキング会議は、毎月1回開催して、これまで3回開催しました。これまでの内容と、今後、ワーキング会議としてどのようなことに取り組んでいこうとしているのかについて、ご紹介したいと思います。

●キックオフ講演会の開催

第1回目は、今回のワーキング会議の講師である有限会社日智（ニッチ）の代表取締役である佐藤皓祠（さとう　ひろし）さんから『厳しい都市間競争の狭間で戦う街・黒崎』と題して、佐藤さんが6年間、タウンマネージャーとして活性化に取り組まれた黒崎地区における中心市街地活性化に向けた活動についてご紹介いただきました。

北九州市の副都心である黒崎では、中心市街地活性化計画を契機として、活性化に向けてどのように人に来てもらうか、そして、回遊してもらうかという議論が始まったそうです。集まった方は、黒崎地区が「好き」で「何かをしたい」と思う方々。議論を重ねる中で「こんなことしたい」「あんなことできないか」「それならば、この空き店舗が使える」「この場所を使っていいよ」というふうに話が展開し、思いが具体化、実際に実現することになります。

第2回のまち探検の様子（インスタントカメラと地図を持って、歩きました）

ご紹介頂いた事例の1つに、黒崎が長崎街道（別名：シュガーロード）の宿場街であったことから、シュガーに引っかけてスイーツのお店を期間限定で実際に出してみるチャレンジショップのお話がありました。6店舗が代わる代わる営業をするなかで賑わいの拠点となり、特に女性が再び集まるようになったそうです。そして、ここから巣立った店主の数名が黒崎でお店を出しています。

佐藤さんは、このような経験を踏まえて「まちづくりは、みんなで面白く楽しくやることが、欠かせない要素」とおっしゃっていました。

●資源発掘と可能性を探るまち探検

第2回目は、活性化（賑わいづくり、おもてなしづくり）を考える上での現状と課題を把握するために、参加者全員で地区内を歩いて回りました。そして、「賑わいづくり」や「おもてなしづくり」に活用できる（したい）場所と、そこで何ができそうかについて議論しました。

参加者からは、「今までとは違う視点でまちを見ることができた」や「昔は、もっと多くの人が買い物に来ていた」「地区内をいくつかのゾーンに分けて性格付けをし、回遊してもらえないか」といった声が聞こえました。

まち探検後の議論では、大きくは①駅前や駅前の歩道、②地区内にある3つの公園が活用できるのでは、とのアイデアが出されました。

第２回目のワーキング結果（活用できる場所とそこで出来そうなこと）

場所		賑わいづくり	おもてなしづくり	にぎわい&おもてなし	課題
公園	大保道公園	・月１度程度、青空市を開催（月毎にテーマを決めて。例：スイーツ） ・祭り、イベント会場とする ・ファミリー向けバーベキューができる設備を整える			・イベントに合わせた駐車場の確保が必要 ・買い物をするための駐車場を確保する ・公園や緑地の有効活用 ・駐車スペースの確保
	祇園公園	・屋内型スポーツ（フットサル、テニスコート等）施設	・ペットと触れ合える施設		
	清六橋公園	・祭りに合わせたイベントの実施	・テニスコート、フットサルコートとしての活用	・大保道公園とセットでイベントの開催。２つの流れができる月毎のイベント。	
駅前・駅前歩道	駅前歩道	・広い歩道を利用したフリーマーケット等の開催		・ストリートアベニュー（お菓子屋さん、ケーキ屋さんに集合してもらい、カフェテラスのような憩いのロード） ・土日は歩行者天国で、野菜や果物等の特産品販売	
	駅前	・子連れで利用できる施設（図書館・児童館） ・回遊したり、留まることができる場所の創出（お茶するお店）	・案内板の設置	・市役所の出張所 ・レンタサイクルステーション（駅前、メインストリート） ・立体駐車場の建設	
共通	空店舗	・メインストリートの空き店舗の入居促進 ・チャレンジショップ		・大保道公園のイベントに空家を活用した休憩スペースのようなもの	
	その他	・駅より大保道公園までの導線に青空市にあわせて何か催し物を。 ・外国人とのふれあいイベント ・駅前道路の交差点に多世代が行く物販店		・３つの公園で連携した同時イベントの開催による活性化	

●活性化の方向性（ビジョン）の検討と共有

第３回目は「現状認識と賑わいのあるべき姿の検討・共有」と題し、講師である有限会社日智の佐藤さんの進行のもとSWOT分析による地区の状況把握を行いました。強み、弱み、機会、脅威という４つの視点で地区を捉えた場合に、どのようなことが言えるかを出し合い、その結果から賑わいづくりのアイデアを考えました。

班に分かれて検討してもらった結果、各班からは「駅利用者が多いこと」と「駅前の環境が良いこと」また、「空き店舗や空き家があること」と「生活しやすいこと」を掛け合わせたアイデアが出されました。

また、地区の活性化に向けては「強み」や「機会」を活かしてどのようなまちを目指すのか、その方向性（ビジョン）を共有し、その理念のもとに計画・事業を検討、実施していくことが重要との佐藤さんのアドバイスのもと、方向性についても検討しました。その結果、「大好きです。ホッとする町、小郡」「ひなたのまちづくり、小郡」という方向性が導きだされました。

これをまずは足掛かりとして「その方向性のもと、具体的にどのようなことに取り組んでいくか」が、今後の議題となっていきます。

●新しい人の流れをつくる

ワーキング会議では、方向性を共有した上でそれを実現するための取り組みを実際に行うことを目指しています。

これまでの議論の内容を振り返ると、参加者の皆さんの現状認識としては「1日1万人が利用する駅を活かしきれていない」という点は共通しているようです。事務局としてもそれなりの利用客がいるにも関わらず、お店がある方に人が流れていないと感じています。その要因としては、昨年度行った市民アンケート・事業者アンケートの結果からは「お店の魅力が伝わっていない」や「お店そのものの魅力が低下している」「お店側が固定客に依存してしまっている」ということが言えそうです。実は、この地区でよく言われる「駐車場が足りない」という意見は、アンケート調査では、市民、事業者ともにそれほど課題としていないことが明らかになっています。

そこで、活性化に向けた１つの方策として、新しい人の流れをつくることができないかと考えています。幸い、地区内には適度な広さがある公園がいくつかあります。第４回目は「活性化に向けた課題の絞り込みと解決策」をテーマ

に、第５回目以降は解決策の実行に向けて議論を重ね、最終的には公園を使った取り組みが実施できればと思っているところです。公園を使った取り組みがゴールではなく、それは、あくまでも活性化に向けた第１歩。そこから「新しいお店」や「小郡を目的に訪れる人」「小郡って楽しい（面白い）という声」が増えていき、小郡らしい活性化が実現できればと思っています。

ワーキング会議では、引き続きメンバーを募集しています。小郡市が好きで、西鉄小郡駅周辺地区の活性化に関心・チャレンジしたい事業者及び一般の方なら、どなたでも参加可能です。詳細については、小郡市商業活性化協議会事務局までお問い合わせ下さい。皆さんのご参加をお待ちしています！！

（やまさき　ひろゆき）

【お問い合わせ先】
小郡市商業活性化協議会
（事務局：小郡市商工企業立地課）
電　話：0942-72-2111（内線 142）
ＦＡＸ：0942-72-5050
E-mail:shoko@city.ogori.lg.jp

香陵校区　都市高速道路高架下の土地利用検討のためのワークショップ開催

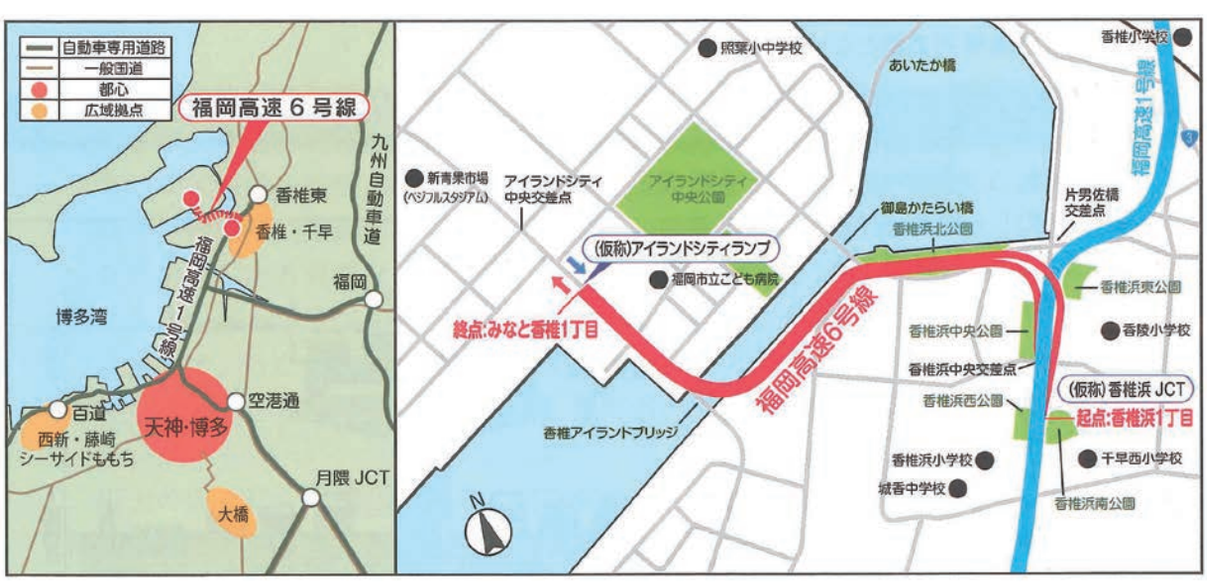
山田　龍雄

現在、都市高速道路１号線から分岐し、アイランドシティへ延伸する都市高速道路６号線の工事が、平成 33 年度の供用開始を目指して着々と進んでいる。

天神方面からアイランドシティへ向かう高速道路は、「イオンモール香椎浜」の前面にあった旧中央公園の東側で工事が進められている。この工事の関係で中央公園は現在地から西側約１kmの位置に２倍の規模で移転することとなっている。

私が住んでいる香陵校区の西側を通る６号線は、アイランドシティから天神方面に向かう道路であり、既存の１号線の上をまたいで、タッチする構造となっている。香陵校区にかかる部分の高さは、橋脚の梁下から最大 10 数メートルになる。

都市高速道路６号線が分岐するエリアの隣接地は住宅地及び商業地であるため、高架下にフェンスを設け閉じた空間とした場合、景観及び住環境としても望ましいものとはならない。このため、３年前から福岡市下水道局計画部都市高速道路推進課より、「地元で何か高架下の土地利用を考えませんか」と要請を受けていた。



都市高速道路６号線高架下の位置（福岡北九州都市高速道路公社パンフより）

平成 33 年度開通を目指して着々と工事が進んでいる都市高速 6 号線

各班からの報告の様子。学生アイデアに対する意見と独自のアイデアを語る

2 年前にも校区内の住民 30 数名が参加し、簡単なワークショップを開催した。この時には、「高架下にはどのような機能があればよいか？」というテーマのもと、参加者に自由にポストイットに記入してもらい、グルーピングするといったものだった。

この第 1 回目のワークショップの時には、カフェやコインランドリー等の商業的利用、広場、児童館や子ども向けスペースといった多くのアイデアが出されたが、気楽に立ち寄れるような居場所を求める声が特に多かったように思う。

今回､2 回目のワークショップを 3 月 11 日に、香陵校区住民 9 人とまちづくり協議会の事務局会議メンバー等を併せて 20 数名で実施した。

九州大学工学部建築学科の末廣研究室の学生さんにアイデアを募り、イメージ図を描いていただいた。また、当日は模型をみながら、説明をしていただいた。

学生さんのアイデアは、ミニ集会所、ドッグ･ランコース、子どもの遊び場（高速道路の橋脚を利用したアスレチック遊具の設置等)、スケートボード場といったものであった。

また、香陵校区側との境界部には、あえて緩衝緑地等は配置せず、開放的な空間としていた。参加者には、イメージ図や模型を見ながらアイデアを膨らませてもらうような進め方で行った。

ワークショップでは、①学生のアイデアに対する意見、②新たなアイデアの提案を行った結果、次のような意見が出された。

①については当然、事前に厳しい意見が出ることは承知していたのであるが、学生の自由なアイデアを提案してもらいたいということもあり、あまり条件を付けていなかった。

【学生アイデアに対する意見等】

・維持管理を誰がするかが問題。
・収益をあげるためには NPO 等の法人格が必要。
・建物の建設後、維持管理が継続的にできるのかが疑問である。
・スケートボード場は、周辺が住宅地なので騒音等を考えたら、馴染まない。
　また、日常的な管理が必要となってくる。
・アスレチックの遊び場を橋脚に掛かるようにしているが、橋脚の維持管理との関係では厳しいのではないか。　　等

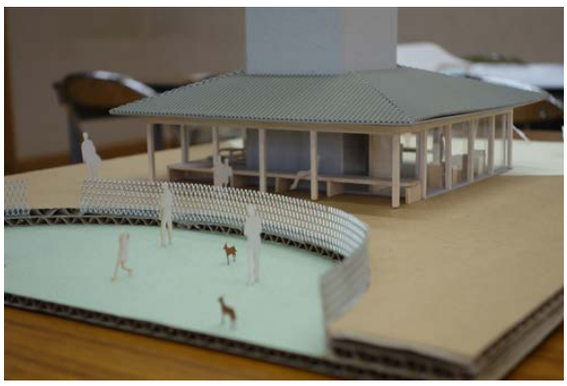
【主な新たなアイデア】

・高齢者等のための健康公園
　（ストリートファニチャーの設置）
・子どもが安全に遊べる広場
・ふらっと立ち寄りやすいサロン
　（日替わり主婦提供の喫茶店、ミニ図書室、
　　バスの待合せ場所、等）
・防災備蓄倉庫、トランクルーム
・イベント広場　　等々

高架下利用での最大の課題は、参加者の意見から出されたように、機能、内容によって、自治会又は団体が維持管理をどこまで担うことができるかであろうかと思う。

この維持管理の主体を決めないことには、福岡市との土地利用の要望交渉は空中戦になるだろうと思う。また、今回は香陵校区側の高架下の土地利用について検討したわけであるが、イ

九大工学部建築学科学生さんによる高架下のアイデア模型。奥がスケートボード場、手前が橋脚を活かしたアスレチック子どもの遊び場



バス停（留学生会館前）近くに設けたミニ集会場とイベント広場

オンモール香椎浜側の高架下、北側に位置する湾側の高架下、計３か所の高架下の土地利用について同時期に検討しながら考えなければ香陵校区の土地利用の機能も位置付けられないのではないかという意見も出された。

今年度は、対面のイオンモール香椎浜側の高架下と併せて検討できるような体制づくりと香陵校区と隣接している香椎浜校区と一緒に土地利用や維持管理について検討し、着実に周辺環境と馴染んだ、有効な土地利用の実現性について検討を深められればと思っている。

（やまだ　たつお）

近　　況

防災どんたく「あんぜん・あんしんフェア IN イオンモール香椎浜」に参加

防災どんたくとは、市民団体、行政、企業などで構成された実行委員会形式の防災啓発のイベントです。初回は、平成 19 年 3 月 21 日に開催された「ありがとうふくおか 2007」から始まり、今年で 12 回目を迎えます。

毎年、参加団体も広がり、今年は下記の団体が 2/23 日～ 3/24 日の期間中に防災シンポジウム、体験イベント、研修会等を実施しました。

防災どんたくのメインイベントとして、防災に係わる市民団体、企業、東消防署、東警察署、自衛隊等が参加する「あんぜん・あんしんフェア（親子で楽しくぼうさい体験）」が 3 月 4 日（土曜）に「イオンモール香椎浜」で行われました。

このイベントでは防災に関係する 9 箇所のブースが、モールに並びました。

私が所属している建築士会まちづくり委員会（防災部会）も 1 ブースをお借りし、防災カフェ

福岡県建築士会による「紙ぶるる」体験コーナー、紙管間仕切りブースで行いました

液状化グッズによる液状化の実験

屋外では自衛隊による災害時に活躍するジープの展示があり、なかなかの迫力

アマミズタメルンジャーによるショーもあり、親子で楽しんでいました

を運営しました。3年前から防災カフェの開催場所は「イオンモール香椎浜」となり、親子連れの買い物客が多く参加してくれるようになりました。

この防災フェアを体験する人は、買い物ついでに5箇所のブースを回って、スタンプを集めれば、お土産（堅パン、缶詰等）をもらえる仕組みとなっているため、楽しくいろいろな防災体験をすることができます。

建築士会のブースでは、建築家の坂茂氏が考案された紙管間仕切りを展示し、その中で住宅相談、「紙ぶるる」、液状化体験（企業協力）、耐震製品の展示等を行いました。

「紙ぶるる」は、紙で作った2階建ての家の骨組みの模型①筋交いなし、②筋交い1階のみ、③筋交い1、2階ありの3タイプを並べ、先ずは家の揺れ方の激しいと思う順に番号をつけてもらいます。実際に揺らし、子どもたちに家の揺れ方を体験してもらうコーナーです。

私は、この体験フェアのお手伝いは5回目になります。今年の「紙ぶるる」体験には、親子合わせて約190人が参加してくれました。

「紙ぶるる」は、子どもたちと会話しながら、簡単な建築の仕組み教えることができます。子

各展示ブースの出展団体と内容

	団体名	出展内容
①	福岡レスキューサポート バイクネットワーク	・展示バイクに乗って写真撮影！　災害に役立つ新聞紙の食器づくり体験。災害時にバイクの機動性を活かして被災地支援・防災啓発をする団体・活動紹介パネルの展示
②	自衛隊福岡地方協力本部	・ジープに乗ってみよう。災害で活躍する自衛隊車両の展示や、ちびっこ制服の試着体験。屋内では自衛隊の災害時の活動写真や戦闘糧食と防災グッズの展示・販売
③	東警察署	・大災害に備えた再点検 ・パトカーの展示、屋内では福岡県警の災害警備活動状況のパネル展示
④	東消防署	・ちびっこ消防服の試着体験 ・住宅火災報知器の展示、火災予防のための展示やチラシ配布
⑤	福岡あん・あんリーダー会	・非常持ち出し袋の紹介 ・防災紙芝居＆塗り絵コーナー、防災腹話術、活動紹介等のパネル展示
⑥	地域防災協会 ボーイスカウト福岡第57団	・災害時等に役立つロープワークを親子で体験。 ・防災に関するパネルやグッズの展示
⑦	福岡県	・災害や防災に関するクイズ ・平成29年度北部九州豪雨災害のパネル展示 ・その他災害のパネル展示
⑧	(公社)福岡県建築士会	・紙の住宅模型「紙ぶるる」体験。丈夫な家の仕組みの解説 ・液状化装置や耐震に関する製品展示
⑨	あまみず社会研究会	・アマミズタメルンジャーによるショー ・あまみず学習ゲーム（缶バッチプレゼント） ・都市型水害抑制技術の紹介

どもたちも興味をもって揺れ方クイズに参加してくれ、なかなか楽しいものがあります。

参加してくれた子どもたちの多くを、小学生の低学年が占めていました。小学生低学年のときに、簡単ではありますが、このような建築の仕組みを知ることで建築に少しでも興味を持ってくれる子どもたちが増えれば、喜ばしいことです。（山田　龍雄）

表　紙　解　説

福岡市の人口は平成 19 年から平成 29 年の 10 年間で約 14 万人増加している。区別に増加寄与率をみてみると博多区（25%）、東区（22.8%）、西区（19.1％）、中央区（17.5％）と、この 4 区で増加人口の約 8 割強を占めている。城南区と早良区と南区の増加人口は 1 割に満たない状況である。

●人口増と人口減エリアが固定化しつつある

さらに校区別でみてみると福岡市では志賀島、北崎、脇田地区など市街化調整区域のところは過疎化が進んでおり、さらに旧市街地や昭和 40 ～ 50 年代に開発された戸建て住宅団地（ニュータウンと呼ばれた住宅地）の減少が進んでいる。

福岡市内では、人口増と人口減の地区とのエリアが固定化しつつあるといえる。

●若年世帯は福岡市外を選択している率が高いのでは？

一方、若年世帯（25 ～ 39 歳）人口の増加状況を区別でみてみると、全体では約 3.3 万人も減少している。区別にみると増加しているのは博多区のみで約 2,000 人増となっている。

表紙に示したように増加しているのは新たな開発がされている住宅地や単身用の賃貸マンションが多く供給されている校区であり、若年世帯の人口の偏りが進んでいるといえる。

若年世帯の多くは、賃貸住宅に居住する年代だと思うが、福岡市内ではなく、市外へ移り住む世帯も多いのではないかと推測される。

この点に関しては、今後、年代別の人口移動、世帯移動の状況を調べる必要があると思う。

区別の人口増減の比較（H19 年と H29 年との差）

	全市	東区	博多区	中央区	南区	城南区	早良区	西区
平成19年	1,426,724	281,635	201,729	172,264	247,107	129,067	211,308	183,614
平成29年	1,567,189	313,575	236,859	196,787	259,478	131,242	218,779	210,469
差	140,465	31,940	35,130	24,523	12,371	2,175	7,471	26,855
増加寄与率	100.0%	22.8%	25.0%	17.5%	8.8%	1.5%	5.3%	19.1%

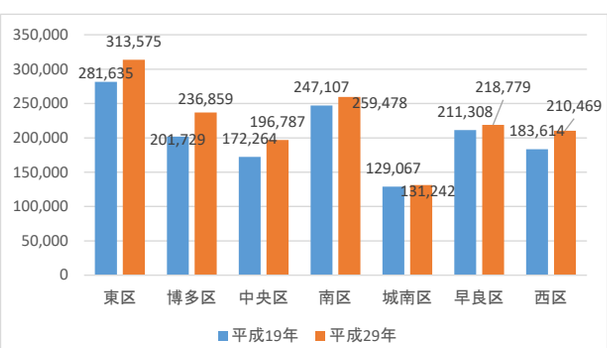
出典：福岡市区別人口推計値

区別の若年世帯の人口増減の比較（H19 年と H29 年との差）

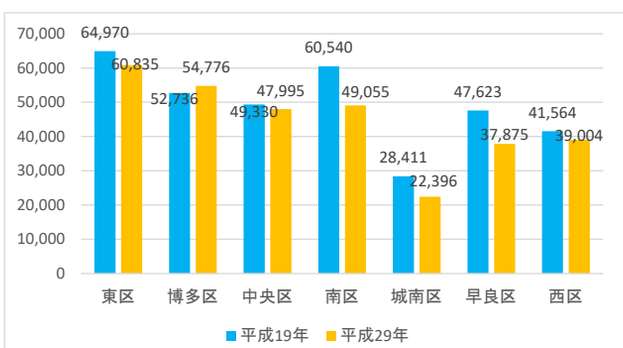
	全市	東区	博多区	中央区	南区	城南区	早良区	西区
平成19年	345,174	64,970	52,736	49,330	60,540	28,411	47,623	41,564
平成29年	311,936	60,835	54,776	47,995	49,055	22,396	37,875	39,004
差	−33,238	−4,135	2,040	−1,335	−11,485	−6,015	−9,748	−2,560
増加寄与率	100.0%	−12.4%	6.1%	−4.0%	−34.6%	−18.1%	−29.3%	−7.7%

出典：福岡市区別・年齢別人口推計値

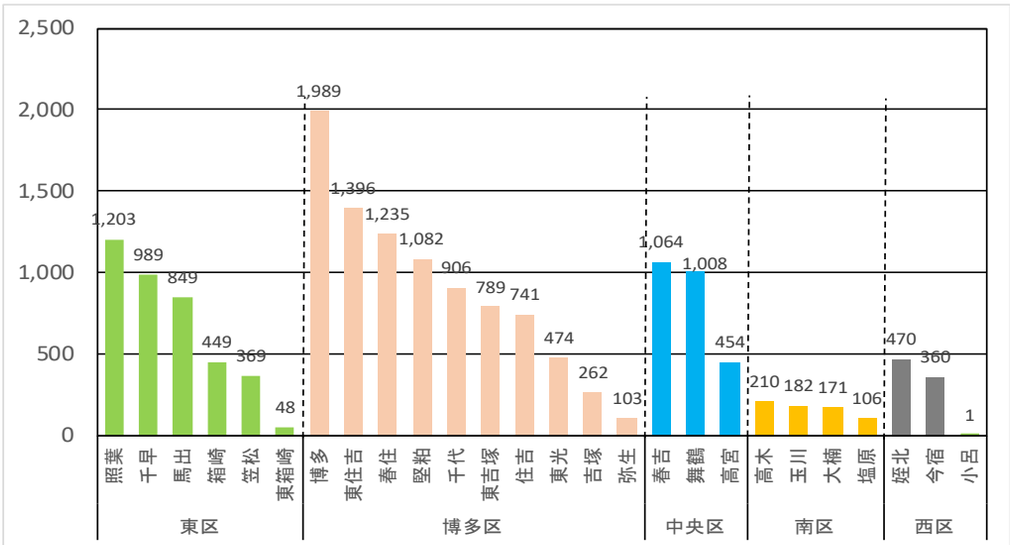
区別人口の比較（H19 年と H29 年との差）



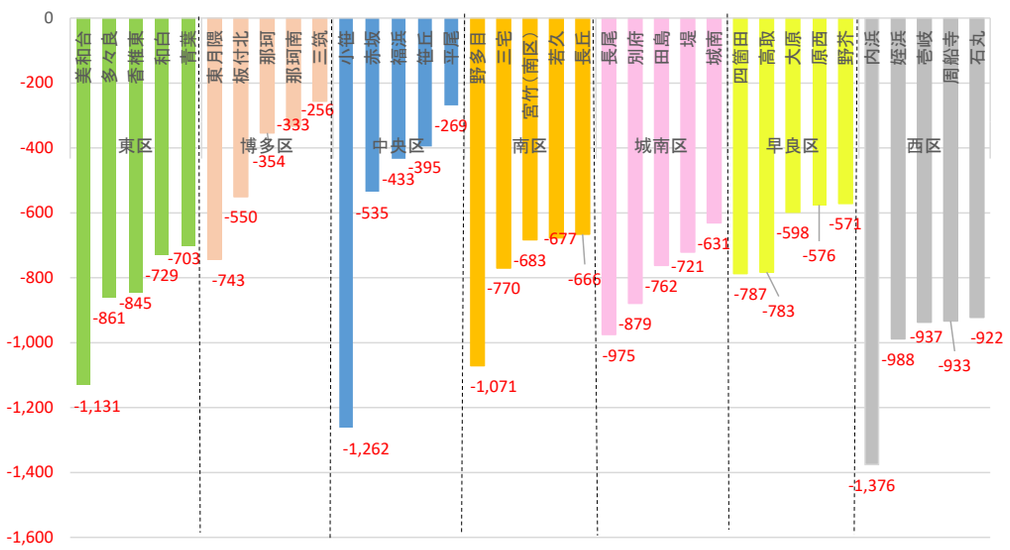
区別・若年世帯人口の比較（H19 年と H29 年との差）



区別・若年世帯人口が増加した校区（H19 年と H29 年との差：全て）



区別・若年世帯人口が減少した校区（H19 年と H29 年との差：ベスト 5 まで）



出典：福岡市住民基本台帳（校区別人口）

福岡市も校区別にみると少子高齢化等により、人口減及び若年層の減少がみられ、年齢別人口構成がアンバランスになってきている地域が多くみられる。

今後は、地域ごとに人々のつながりを強め、地域の魅力を高めて、一度、地域を離れた子どもたちが戻ってくるようなまちづくり、故郷づくりが必要ではないかと考える。

（山田　龍雄）

編集後記

よかネット今年の年度末は報告書作成に加えて、海外出張があり、バタバタバタ。相変わらず自分のスケジュール管理能力の低さに悩まされる年度末でした。（け）

よかネット　No. 130　2018. 4
（編集・発行）
㈱よかネット
〒 810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6205-3600
東京事務所　TEL 03-3288-0240
名古屋事務所　TEL 052-462-1030
㈱地域計画・名古屋